

自己責任論の現在

——もがく学生たち——

池 野 重 男

(1) は じ め に

少し前に私は、「助け合いの職場・社会を求めて」（本誌第58巻第5号 07年11月）において、卒業生のひとりが演習（ゼミ）と講義（保険論）で「なぜ九カ月で証券会社を辞めたのか」と題して話してくれた（二〇〇七年六月）際に、それを聞いていた学生たちからその卒業生に対して予想外に厳しい批判・非難が多くあり、どうしてこのような声生まれるのか、その背景を解明した。そこには、国・企業の国際的生き残りを賭けての規制緩和を背景とした「自己責任」論の普及があった。そして、前稿「脱リスク社会」（本誌第63巻第2号 12年7月）でそのことを検証した。

今日の社会の特徴を一言で言えば、企業の好き放題を規制することを長い間かけて獲得してきた先人たちの成果、たとえば圧倒的な力関係の差を克服すべく結成を認めさせた労働組合の諸権利、弱者強食を必然化する競争の緩和、企業の論理を市民の生活倫理に従属させることへの規制、国籍・性・思想などを理由とした差別の禁止……などなどを、国・企業（資本）が一気になし崩しにしようとしていること、そして、それらが多くの人たちによって「仕方がない」・「やむを得ない」と受け入れられている、ということである。

先の卒業生による講演に対する在学学生たちの非常に不本意な反応を承けて、同年十月の本学生協主催による雨宮処凛講演会への参加を学生たちに求めるとともに、あらかじめ同氏の『生きさせろ！ 難民化する若者たち』（太田出版 07年）を読んでレポートを提出するという課題を出した。そのレポートにも自己責任論が見られたが、雨宮氏の講演会直後の質疑にも相変わらず自己責任論が展開された。まことに根強い「仕方がない」・「やむを得ない」という心性の深さを痛感させられた¹⁾。

じつは、こうした自己責任論は学生たちだけの間に深まっているのではなくて、広く世間のなかに蔓延しているのである。だから、彼ら・彼女らはそれぞれの成育史の中に、そして日々の日常の中に、そうした風潮が広まっていたのである。そこで本稿では、そうした風潮を学生たちのレポートとマスコミなどに見られる論説、とりわけ私のテーマとした高齢社会論の中から分析・紹介してみる。なお、高齢社会論と私の関わりについて言え

1) 本文中の雨宮処凛講演会や『生きさせろ！』についての学生たちの感想については、それらをまとめて小冊子にして配布し、講義の中でコメントしている。

ば、団塊の世代である私はいよいよ老人の域に入ろうとしていることもあって、かつての論稿「国民健康保険の赤字は改革すべきか(1)(2)」(本誌第194号 90年3月, 同195号 同5月)や「高齢化社会論の現在」(同201号 91年5月)などに続いて、再び高齢社会論に取り組もうと考えたのである。

この高齢社会に関連しての読書の中で気づいたのだが、ここにも「仕方がない」・「やむを得ない」という発想が根強くあった。考えてみれば、私の職場にも「学生はお客様である」というスタンス²⁾からの“改革”路線の中で、「人は経済的的刺激を動機として働くから勤務評価をしなくてはいけない」と成果主義³⁾——「人は自分のトクにならないと働かない」!?!——が導入されている。だから、なにも学生たちだけが特殊なわけではない。

-
- 2) 木附千晶「見放される子どもたち 小1プロブレム“手のかかる子”は発達障害?」(『週刊金曜日』12年7月13日)は、社会支出を減らしたい政府が目指す障害児政策の中身を検証するなかで、「どんな障害があっても、どんな場所でも、それぞれのニーズに応じた適切な教育を」と謳うのは建前であり、その内実は親の負担が「自己責任」の名の下に重くなる事態を描いている。医療界においてもやたらと「患者様」(「患者本位」という文言が使われているが、「もしほんとうに『患者本位』と言うなら、患者のわがままもすべて聞き入れなければならないはずだ。今の『患者本位』は、医療者の許せる範囲でという、透明な但し書きのついたものだ。そんなご都合主義的な『患者本位』を宣伝するから、患者が混乱し、勘ちがいをする」・「小学校から受験に明け暮れ、成績さえよければちやほやさされ、自分のことだけ考えて育った者に、人格など備わるわけがない」(久坂部羊「暴走する“患者さま”」『中央公論』07年12月号)。
- 3) とりわけ男性がこの成果主義、自己責任論に囚われている。上野千鶴子「男よ、素直に弱さを認めよう」(朝日新聞「孤族の国」取材班「孤族の国——ひとりがつながる時代へ」朝日新聞社 12年)は、男性の問題に絡めてセーフティネットとされてきた「家族」や「企業」に対してもうひとつの見方を示す——「孤独死や行旅死亡人が注目され、『家族がいるのになぜ?』という驚きの声が聞かれますが、家族は昔からそれほど頼りになるものだったのでしょうか。いまや家族は資源であると同時に、リスクにもなる時代。一人であれば一人で死ぬだけですが、極端な話、家族といえば殺されるかもしれないのです。／そもそも一人であることの何がそんなに悪いのでしょうか? ……男性は弱音が吐けない上に、新自由主義的な『自己責任論』によって、さらに追い込まれている。……パワーゲームの企業社会のノウハウしか身につけてこなかったから『困っている』と言い出せない。でも、その最初のステップがないと手を差し伸べられません。」(pp. 115~117) この見方と、「結婚するか一人で暮らすかは、基本的には個人の選択の問題です。……ライフスタイルの選択肢が広がったことは社会として歓迎すべき」と言うものの、それにすぐに続いて相変わらず、「一方で、一人暮らしは、いざというときに支えてくれる同居家族がない点で、さまざまなリスクを抱えるのも事実です。例えば、失業や病気によって働けなくなれば、貧困に陥るリスクが高まります。結婚していれば、配偶者が働くことでやり繰りできますが、単身世帯ではこうした助け合いができません。／また、介護が必要になった場合の対応も難しくなります」(pp. 111~112)と言う、藤森克彦「単身リスク、みんなで負担を」(同上)との違いは明らかである。なお、成果主義が跋扈している最近の例として、厚生労働省による「脳卒中などの後遺症を改善するために集中的にリハビリテーションをする『回復期リハビリ病棟』への診療報酬に成果主義を導入する方針」がある——「患者の回復度に応じて医療機関が受け取る報酬に差をつける。リハビリの質の向上と医療費削減の両立が狙い」という。しかし、「何を指標とするか、だれが評価するか課題も多い。医療機関の中には、数値を重視するあまり、若年者に比べ回復が遅い高齢者、特に認知症など別の病気や障害がある人の入院を拒むところが出る恐れもある。」(『朝日新聞』07年12月1日)

ところで、ダメ学生論からは、単なる「近ごろの学生たちは」云々というパターンに堕してしまいかねない。たとえば、石渡嶺司『最高学府はバカだらけ——全入時代の大学「崖っぶち」事情』（光文社新書 07年）が描く次のような図である——「講義にはたしかに真面目に出席しますよ、講義『には』ね。でも、受講態度や学力がついてきているかどうかはまた別問題だなあ」／こう証言するのは某難関大の教授である。……なぜ講義には真面目に出席するようになったか？／この一〇年で大学教員に対する講義評価が強まり、それまでのように大学教員側も簡単に休講したり、欠席者も含めた全員に高い点数をつけたりすることができなくなった。当然、出席点を重視するようになり、学生は講義に出席しなければならなくなった、というわけだ。／しかし、講義への意欲までは改善されていないから、受講態度が悪い学生や学力の低い学生が教員にしてみれば嫌でも目につくようになったのである。／午前中から居眠りするのはまだかわいいものだ。私語や携帯メールはあたりまえ、講義に必要な参考文献を一行も読んでこない、基礎的な勉強を事前にもったくしない、そもそも知らない」（pp. 35～36）

これについて少し論評すれば、少なくとも「この一〇年で大学教員に対する講義評価が強ま」った現実を描くだけではなく、そのことの問題を考えなければならないし、「それまでのように大学教員側も簡単に休講したり、欠席者も含めた全員に高い点数をつけたりすることができなくなった。当然、出席点を重視するようになり、学生は講義に出席しなければならなくなった」という、^{ワンバグ}な認識を自ら問い直さなければならない。こうした点は、「やむを得ない」・「仕方がない」という現実主義を超えるための最低限の義務である。前稿で示した学生たちのレポートを、私がこの石渡氏のような冷やかさで見えていなかったことを感じてほしい。学生たちの重い感情を突き放すのではなく受け止めることから、私は学生たちとの付き合い＝教育をスタートしたいのだ。

本稿は、これらの課題の中からとりわけ学生たちの間に広まっている自己責任論の深さを論じ、もうひとつの課題は次稿（「高齢社会論の貧困」として本誌次号に掲載を予定している）において行なう⁴⁾。

4) 詳しくは、後に予定している別稿で展開するが、とりあえずここでは次の二点を紹介しておく——ひとつは、「心の底では孤独死を、自分の暮らしとは無縁の場所で、無縁の人に起きることだと思っている人が多い」が、現実には「高齢者に限らず、その三分の一は四〇代から六〇代前半を中心とした“若年”孤独死だ」（佐々木とく子「孤独死の大量発生が止まらない」『中央公論』07年11月号）という現実認識であり、もうひとつは、だから男はこれまで「自分のほうが女房より先立つのだから、シングルになるのは妻のほうで、オレには関係ない」と思ってきたフシがあるが、「それが根拠のない思いこみであることがわかる」という、上野千鶴子「女はあなたを看取らない」（『中央公論』07年11月号）が結論的に言う部分である——「男はどうすればいいか、ですって？／そんなこと、知ったこっちゃない。／せいぜい女に愛されるよう、かわいげのある男になることね」。たしかに、自分の生きざまが老後に現れるということを否定できないだろう。だから、老後問題、高齢社会論は、老若を問わないすべての人の問題である。そんな視点から改めて高齢社会論を展開したいと考えている。

(2) しんどい現実に適合しようと頑張る健気な若者たち

学生たちの間に現実主義が根強いと書いたが、より事態を正確に言えば、学生たちを取り囲む活字や映像など多くの人々の目に触れるものが基本的に現実主義、つまり、仕方がない・やむを得ないという思考を基に成り立っているのである。宮川匡司「若手論客の現実的な視線」(日本経済新聞12年6月24日「本の小径」)が言うように、「長い不況の中で育ち、能力主義が推奨される最中に社会に出た世代の視線は、現実的かつシビアである」という状況なのだから、若い学生たちもそれに適合しようと必死なのである。

そうした例をいくつかレポートから示しておこう――

……講演の中で私が一番印象に残ったのは、雨宮さんの言っておられた完全なる平等や社会主義的経済ではなく、「競争したい人、お金を稼ぎたい人はいくらでも稼いでもいいと思う」という言葉でした。以前池野先生は「ひとりだけ飛び出してお金儲けをするのはおかしい。そのお金儲けできた裏側ではその人の働くビルを毎朝きれいにしている人たちがいたり陰の力があるし、その人たちにも平等に分配しないといけない」と言っておられて、確かにそうなのですが、それを掃除の人だからどれくらい、その人の部下だからどれくらい再配分するべきだなどというのはあまりにも細かく難しいことだと思っていました。が、今回の講演を聴いて、その人がした仕事に対していくら価値があるかという考え方だから難しいのであって、その人が大儲けした人たちのような暮らしじゃないにしても最低限人間として暮らしていけるだけの金が必要なのだということ、また、それが今は税金などでの再配分ができていなくて、大儲けした人たちでお金が止まってしまい、お金儲けに失敗したり関心のない人は自分たちで何とかしなさいという状況になっていて、それが経済的な動きだけでなく、私も含めみんなの頭の中にも組み込まれつつあるということを感じました。「競争しなければ生きてはいけません。競争をしないなんてただの怠け者だ。」すごくそれを感じましたし、私もどこかでそれを未だに頭の中に持っています。

おそらく競争しないなんて怠け者だ、競争しない奴は死んでも仕方がないと考えている人たちは、競争に負けてもう一度競争に参加できない状況になった時に、つまり40代後半にリストラに遭い正社員の道にどうあがいても戻れなくなってしまった時に、二つの道を選ぶでしょう。「自殺する」か「競争せずに生きていく方法をとる」か、です。私もここまで書いてきて、自分がもしリストラに遭い再就職をいくら探しても見つからなかった時のことを考えると、自分でもどうしているか分かりません。でも、そうっていないことを望んでしまいます。こうして想像していくと、やはり自分が未だに競争から降りるということに偏見を持っていることが分かりました。つまり、競争から降りることが今の私にとっては避けて通りたいことのように感じます。池野先生や雨宮さんはこの講演を経てこんな感想が出てくるのは残念なことかもしれないです。やはり、こうして文章にして頭の中を整理してみると、ちょっと分かったつもりでなかなか自分の

中にまで浸透していないということに気づきました。今回の講演と授業を通して、私はなんとなく競争しなくても生きていけるということは分かりましたが、自分がそれを望んでいないし、むしろできればしたくないと思っているのだと感じました。私は今のところ競争社会の中で生きていくつもりです。しかし、この講演で競争に負けても生きる方法もあるということを知ったというのが、この講演の感想であり、得たものです。

……自己責任という言葉が重いです。若者を安く使って捨てる会社、そうさせている社会構造が悪いのだらうけれど、もっと自分が優れていれば……と自然に思ってしまいます。会社が悪いんだ！！と思うのも、自分が惨めに思えます⁵⁾。本当に難しい問題だと思いました。

競争から抜け出せた状態が想像できません。競争に勝てた人だけが豊かな生活を送ることができて、競争に負けた人、逃げた人は生きていくことさえままならない生活を送るしかない社会が恐ろしいです。社会に自分が出てやっていけるのか不安で、本当に怖いのです。しかし、そんな現状が分かったからこそ、今までよりも将来についてきちんと考えて、競争に勝つための力をつけたいと思っています。競争から逃げたくても、逃げる道を見つけれません。

私の家族には病気になってしまい、働く機会を失ってしまった叔父がいます。叔父は40歳を過ぎています。祖母はそんな叔父に働くこともさせず、周りから出来るだけ存在を隠します。そして、時々「山に行って死んでこい！」と言います。こんなことを実の母に言われ邪魔者扱いをされている叔父は、精神的におかしくなりました。でも、家族はもう手遅れだと言って何もしません。母は、お金を稼いでいないのに人のお金でご飯を食べていると思って、嫌っています。家族なのに助け合っていけないことが本当に辛いです、寂しいです。

私の家族と雨宮さんの話とは状況が違うけれど、働かない叔父と家族の接し方を見ていて、私は叔父のように家族に責められて生きていきたくないの、しっかり稼いで家族に認められる存在になれるように競争を勝ち抜くしかないと思いました。

5) 中西新太郎「自己責任時代の〈一途〉を映すケータイ小説」(『世界』07年12月号)がこれについて語っている——「自分ではどうにもならない苦難を安んじて引き受け、責任を世界へと投げ返すことのできない心理状況には、今日の青少年がおかれるきわだった社会的孤立が反映されている。言い換えるなら、自己責任イデオロギーが強力に浸透しているということだ。決して社会に救済を求めない『健気』な心情を磨くことでしか運命の愛を発見できないケータイ小説の世界には、これと一見無縁に思える新自由主義思想の精髓が、生の実感として息づいている。／だからといって、少年少女の『一途』の追求を、自己責任イデオロギーの罠にはまる物語とだけみてもならない。理不尽だと知りながら押しつけられた苦難を引き受ける振る舞いには、どんな辛いことにもぶつかっても逃げないプライド、苦難の受容＝所有によってのみ証し立てられる尊厳の自覚がひそんでいる。この点を見逃すと、普通の少年少女が生きる『プライドの戦場』を見失うことになろう。プライドの戦場とは、苦難をどれだけどのように引き受けられるかをめぐる自尊と卑下、共鳴と排除の、観念における闘争である。」

講演会の中で、私の中にいくつか強い印象を残したものがありません。

1つは競争社会。競争には犠牲が必要であるということ、そして、その競争から逃げる自由や権利もあることです。今の社会は、多くの人が踏んでいく道程から少し外れてしまえば一般社会から冷ややかな視線を浴びることになるし、駄目な奴だという烙印を押されてしまう。それが嫌で怖いからこそ、多くの人はその道から外れることができない。私もそのうちの一人なので、その気持はよくわかります。だからこそ競争に参加することを辞める勇気のある人を尊敬するし、羨ましいと思います。

2つ目は、例として出てきた工事現場で一人の派遣社員が亡くなった話です。裁判での従業員の証言、「なぜ従業員以外の人の面倒まで見なければならぬのか」という言葉にはすごくショックを受けました。おそらく現場の人にしてみれば派遣会社や派遣社員側が管理・責任を負うべきだと考えていただろうし、派遣側からすれば現場担当者が管理・責任を負うべきだと考えていたのだらうとは思いますが、それにしても、誰かがかかると気づくべきだと思う。

社会全体がこれらの状況を作ったのだと思います。だからこそ、社会が変わらなければどうしようもないし、私に何が出来るかと言われると、私には何も出来ないと思う。ただ、多くの知識を身につけてから社会に出たいと思いました。……

同じようなものとして、雨宮処凛『生きさせろ！』を読んだ学生たちのレポートの中からとりわけ印象的なものを紹介しておきたい――、

この本を読んで、初めのほうはひどい状態だということを感じたのですが、最後のほうまで読み進めていくと、あまりにもひどい話ばかり続くせいか、だんだん読んでいくと、この本を読んで私も立ち上がらなければ！ という感覚よりも、私の立場が学生のせいなのか、正直に言うと、「こういった企業に入らなければ過労死するほど働かずに仕事と生活の両立もできるだろうからしっかり就職先を見極めて入らないといけない」と感じました。更に言ってしまうと、私が会社の中での競争に敗れ中途採用にも選ばれないような年齢になってクビになった時や過労死するほどの会社に勤めた時に、初めてこの本を読んだ意味が出てくるのかなと感じました。つまり、頑張れば何とかなる、あまり実感が無いと思ってしまいました。というか、あまりにも危険が社会に広がっていることに対し、現実逃避をしているのかもしれない。すごく失礼な言い方になりますが、正直に言ってしまうと、まずは就職をしてみたらというのが率直な感想です。

しかし、そんな呑気な感想を言っている一方で、この本からもっと自分のこととして考えなければならぬと感じる部分もあるのです。それは私の両親についてです。両親は私が高校3年の時まで正社員として働いていました。しかし、その会社がつぶれ自営業を始めました。しかしうまく行かず、それも潰れました。そして今、母はパートをしていて、父は鉄工所の下請け会社で働いています。そのような今の生活環境の中でこの本を読んだ時に、私は自分の父のこととダブる話が多かったです。私の父の仕事内容は

まさに3Kと言われるような世界です。できたての鉄線の先を整えるために、父が鉄線の先を切り整えるという作業です。できたての鉄のため、まだ鉄線は赤々としていて、冬場でも汗が止まらないような職場です。素手で持つことはできないので丈夫な革の手袋で持つのですが、手袋からは煙が出て、長い間持っているとう火傷するほどです。父はよく腕や顔に火傷をして帰ってきます。更に、鉄が冷め始めると表面から細かな鉄屑が出るので、作業が終わった父の鼻の中は真っ黒になると言っていました。実際、車を洗車しても1、2回仕事に出れば鉄屑がついて車が真っ黒になっています。勤務時間は、夜勤が12時間ある日が5日続いて、昼からの日が5日続いて、朝からの日が5日続いて、など3交替制です。だから、父も言っていたのですが、体がその時間帯に慣れてきた頃にまた次の時間帯に代わるので、なかなかしんどいと言っていました。

こんな状況下で父が働いているので、この本の中の話は他人事ではないのです。この本を読んで、前々からこの仕事はできるなら父に辞めてほしいと思っていたのですが、ますますそう思うようになりました。しかし、仕事を辞めてしまうと父が再び正社員になれる仕事といっても難しいことと、結局、正社員で働くためには3Kのような世界しかないのではないかと思います。

更に心配なのは、こんな状況で年金がちゃんと納められているのかと心配です。父には直接聞いたことがないので分かりません。私はあと2年でおそらく社会人になっているので、それまで頑張ってもらえたらと思っています。しかし、私が社会人になったからといって、両親2人の面倒をすべて見れるような生活は出来ないのは目に見えています。でも、どうしていいかという答は、この本を読んでもないままです。今現在生活がなんとかやっつけていけているだけに、また「なんとかかなるのでは」と考えてしまっています。なんとかかならなくなる前に、どうすべきなんでしょうか。

本当に言葉が出ませんでした。……私の勝手な想像で、普通にアルバイトをして稼いでいれば生活に困ることはないと思っていました。それは、私がバイトで稼いだ分を自分の為に使い、そして光熱費、水道代、家賃などを払っていない状態でお金を貯めることが出来ていたので、それだけあれば十分だと甘く考えていました。本当に甘すぎた、と今では心の底から感じます。本を読んで思ったことは、自己破産や生活保護のような方法、フリーター労組や「もやい」などの手助けをしてくれる存在の情報を知っている人が実際にどれくらいいるのだろうか、ということです。普通の暮らしという言い方をするのは変ですが、金銭面や生活面において生を脅かされないレベルに暮らしている私たちがこうした情報を耳にする機会などあまり無いような気がします。……しかし一方で、漫画喫茶やネットカフェで暮らす人々や公園などで寝ているホームレスの人々にもこのような存在が知られていないような気がします。もし知っているならもっと多くの人が家を持ち、少しでも死と隣り合わせの生活から離れることが出来ると思います。

もうひとつ、私に真っすぐ届いた部分は「高校生の職業意識格差に晒される子どもたち」でした。大学に入って半年の私にとって一番身近に考えることができました。私も

中学時代不登校だったので、高校進学が危ぶまれた時期がありました。しかし、そんな状況でも本能的にフリーターはダメだと考えていたし、大学を出て会社に正社員で就職することが当然だと、誰にも言われた訳ではなく思っていました。きっと、社会の風潮として無意識にそれを感じていたのかもしれませんが……

厳しくてしんどい現実には負けまい・落ちこぼれまいと必死に頑張る彼（女）らの姿が、これらのレポートにある⁶⁾。私の課題に正面から取り組んでくれていて、教員としての手応えを感じさせてくれる。しかし、残念なことに、そのことが彼（女）らの生きやすさを保障するのかもしれない、けっしてそうではない。同じことは、《よりよい就職》のために資格をできるだけ多く取るという学生たちにも言える。だからこそ、私たちはこの思考法そのものを問題としなければならない。「競争から逃げたくても逃げる道を見つけれません」・「競争に参加することを辞める勇気のある人を尊敬する」という声は、彼（女）らの紛れもない悲鳴である。何としても、それらにも応えなければならぬ⁷⁾。

(3) 相変わらずの自己責任論

……100社以上の会社に行った人はその人に問題があると思っていたけど、よく考えてみると100社も行く気になることがすごいことだし、それだけやっているんだから精神的におかしくなるのは当たり前だ、と思うようになりました。……いま30代の人たちがアルバイトで生活しているのはその人たちが就職活動をさぼっていたからだというのは、この人たちがいま就職活動をするのとは全然違うと思うし、「生まれてくる時代」というのは自分では決められないことなので自己責任というのはどこまでの責任なのかということを考えさせられました。……

6) 「雨宮さんの話を聞いていて、しんどいことから逃げているように感じました。……過労死するぐらい働くのは絶対に間違っていて社会が悪いと思うけど、それを覚悟の上で働いてやるぐらいの強い気持ちで乗り切ることが大切なんじゃないのかなと思いました。」というレポートもあった。

7) 東海林智「なぜ闘わないのか」(『週刊金曜日』12年6月22日号「いま、ここからのソリダリティ—連帯—」第18回)が、停滞した今日の労働運動状況のなかにあつて「安心して働ける民主的な会社をしようと、非正規労働者と共に組合を立ち上げ闘っている」宮古毎日新聞労組の女性組合員を紹介しているので、具体的な事例として示しておく——「契約社員のこの女性は組合に参加したことで、記者職から職種を変えられ、契約更新のたびに労働条件の不利益な変更を強制されている。おまけに、組合を脱退した人は次々と正社員に登用されている。／けれど彼女は組合にとどまり、仲間と共に闘っている。彼女は言った。『私たちは“生活のため”と言いながら、酷い状況があつてもそれを見ながら、見て見ぬふりをする。生活のために人間の尊厳を売り渡さなければならないのか。……私はそんな……ことはしたくない。労働組合として団結権、団体行動権、団体交渉権をもつていながら、闘わずに尊厳を売り渡すことはできない。私にはそんな気持ちで闘う仲間がいる。私ともう一人の非正規の仲間の争議でみんながストに入り、書記長は六〇日を超えるストを闘っている。仲間は私の自慢であり、誇りである』……シングルマザーの彼女は一人息子に生き方を教えているようでもある。『たった八人の仲間を全国の仲間が応援してくれる。厳しい中不安な中、全国の仲間を支えられ、私たちは立っている』と言つた。」

……近年「自己責任」という言葉をよく耳にするようになってきた。私たちの場合では大学の講義では「単位を取れないのは自己責任である」などと、私たち生徒の間でもサボる口実としての自己責任論を使う。あくまで「単位が取れる」という成果重視に偏っている。また、先生は講義をするだけやって指導の内実を問わず、すべて生徒へ責任転嫁してしまったり、しなかつたり……。 「自己責任」という言葉は、現在の世の中の風潮ではとても都合がよく、利用頻度が高まってきているのだ。

できない者は「自己責任」だからそのまま置いていく……。個人の幸福とは何なのか？ 学歴や職歴などの競争から離脱するのは自由であるが、離脱していく人々には今の社会はかまってくれない。「やりたい」・「なりたい」という目的がもてない風潮もある。だから、定職に何でもいいから就いてイヤイヤ労働することになる。職に就かずフリーターになれば世間というものが冷たい目を向け、派遣労働に就かざるを得なくなる。だから、企業には都合のいい労働者は増える一方になる。こうしてネットカフェ難民やマクド難民が出現してしまっているのに、これらを簡単に一言で「自己責任」とだけで片付けてしまう。今は会社の社員の生活より、会社の利益が優先になってしまっていて、使えない者は捨ててしまうのだ。これらを総合して、格差というものに繋がってくる。

最近、このような話や記事を見ると、就職したくなくなる。この先、希望が見つからないのだ。「自分らしく働く」ということは理想でしかなく、今の社会では「やっていけない」という風潮はおかしいと思う。「自己責任」という言葉を軽々しく使ってはいけない気がするし、「逃げずに現実としっかり向き合う力をつけろ」という雨宮さんのメッセージだったと思う。

このように雨宮講演のポイントを掴まえているレポートもあるが、相変わらず「自己責任」論にこだわるレポートの多さが目立った。そのいくつかを以下に挙げよう――

……自己責任との絡みからイラクで人質にされた3人についての話も挙がりました。自分はどうしてもこれに納得がいきませんでした。彼らの場合は危険を承知の上で現地へ赴き、その結果捕えられたのです。しかも、解放のために国が莫大な税金を支払うことでようやく助けられました。危険を承知でわざわざ行くなら、せめて誰にも迷惑をかけるようにすべきではないのか、と思います。自分で処理しきれない、責任の取れないことにまで手を出し、誰かに尻拭いしてもらっているうちは、どんなに崇高な理念や理想を掲げていようと、屁理屈をこねている、ただの餓鬼と変わらないと思います。自らの力量とその限界をわきまえてから行動を起こすべきです。

確かに、ひとりひとりが社会の矛盾を見つめ、悩み、憤りを抑えきれず「自分にできる何かをしたい」、そう思うことは素晴らしいことだと思います。しかし、次にすべきは今の自分に何ができるかを冷静に見つめ直し――その想いがただの偽善ではなく強固かつ純真であるならば――その実現に向け、力を養うことではないのでしょうか。

……自己責任論がよくないとおっしゃってましたが、確かにそうだと思います。でも、何でも自己責任にするのもおかしいけど、何でも自己責任ではないというのもおかしい気がしました。それって自由とわがままを捉えちがえてないのでしょうか？ また、責任転嫁のしすぎだと思いました。

……雨宮さんは自己責任論のどこが問題か？ などの質問に対し、「私は自己責任論者でしたが、自己責任論をイラク人質バッシング事件を機会に捨てて、優しくなれた。自己責任論を捨てると人として優しくなれる」というような内容のことを述べ、感情論で答えていました。また、他の質問に対しても感情論で答えたり、少し話の逸れたことを言い出して最後のほうに無理矢理質問の答に繋げようとしていて、何が言いたいのかわかりませんでした。自分の意見を人に伝えようとする時には感情論ではなく論理的に話してもらわないと、反対意見の人間もいるわけですから、感情論では（特にこういった政治的問題については）納得させる力がないです。また、ある「事物」を批判する時にはその批判意見を述べた後に、その批判した「事物」に代わる新しい「事物」やその批判した「事物」をプラスに変えることができる政策やシステムなどを述べてもらわないと、「あんたそんな批判してるけど、じゃあ他にどうすんの？」となります。今回の講演でも雨宮さんは批判するだけで、自分なりの新しいシステムなどを言ってくれなかったので説得力がなかったです。「ゆるく生きれる社会」や「釣りバカ日誌」や「競争しない自由」などと抽象的なことを言われてもピンときません。……

また、雨宮さんがDVDを見せてくれましたが、驚いたことがあります。それは雨宮さんが自分のデモを見せた後に、ある青年のデモを見せながら「この男の人は策士で、デモを3人で申請して、本当に3人でやったり、申請してボイコットしたりするんです」と言いました。デモって申請して行なうんですね。知りませんでした。他のデモも申請して行なっているんですね。それってデモですか。デモって急に街で行なうから「迷惑」な存在として注目が集まるものだと思っていました。申請せずに逮捕覚悟でもっと派手にやったほうがニュースにもなるし、世論も動くのではないですか。雨宮さんの見せてくれたDVDのデモで社会が変わるとは到底思えませんでした。そのデモに費やした時間をもっと利用してもっと本を書いたほうが効果的ではないでしょうか。

政府が言う「危険地域」というのはどういう意味なのか？ マスコミが政府の危険宣言を承けて記者（正社員）を退去させているとすれば、そこで起きていることを誰が伝えるのか？ 非正規のフリー・ジャーナリストなりカメラマンなどからの記事・映像をマスコミは買い取るのである⁸⁾。そして、それによって事実の一端を私たちは知ることになる。

8) 『『誰も行かないのなら、われわれが行く』というスピリットを持った多くのフリーランスは、世界のさまざまな地域で戦争や不条理に苦しむ人々の姿を記録してきた。脈々と流れるその精神を私たちも受け継いでいきたい』という野中章弘氏によれば、「長井【健司】さんがデモ隊の最前列（逃げるときは最後尾）にいたのは当然である。……フリーランスはテレビ局や通信社のカメラマンよ

とすれば、イラクで人質となった人たちをバッシングするということはどういう意味をもつのか。

そして、「感情論」という言い方について。雨宮さんが女性だから、そうした言葉での非難をしていないか？ その上で、感情論という言い方そのものが非難のニュアンスを含んでいることの意味を考えてほしい。そこには、理性的であること・冷静であること・客観的であることが善という価値観がある。しかし、客観的ということは、じつは他人事的でもあり、対象に対して冷酷になるということを考えてほしい。感情論というのは、そこには激しい怒り・嘆き・喜びなどで溢れているぶん、対象に対して主体的でもあるのだ。自分の立場を明確にしている点で、むしろ優れているとも言える⁹⁾。

さらに、《代案を示せ》という批判について。安倍元首相が『美しい国へ』のなかで「自分の命は大切なものである。しかし、ときにはそれをなげうっても守るべき価値が存在するのだということを考えたことがあるだろうか」と書いているというが、これははたして具体的な代案なのだろうか？ 権力に向かっては批判しないというのは二枚舌である。「代案を出せ」と言い立てるのは、大概が何もしない自分の正当化のためか、あるいは、既に決めた事案を何としても強行する側の口癖である。現にこのレポートも雨宮氏が行なったデモ——紛れもない代案である！——に対して「逮捕覚悟で派手にやったほうがニュースになるし、世論も動く」と批判する。自分は何もしないで批判するだけならば、いちいち文句をつけるな、と言いつつ返したい¹⁰⁾。

そもそも、「代案を出せ」という言い方は、歴史的に正当な発想だろうか？ 封建主義から資本主義へ移行した時にいったいどれだけの人々が具体的なイメージをもって体制変革を行なったのだろうか？ まず破壊ありきであったはずだ。

ところで、デモとか訴えるための手段としての選挙、あるいは生活保護の申請とか、具体的な意志表示や実践・提案への拒否感や嫌悪感を含んだ強い批判が数多くあった——

りも、もっとインパクトの強い映像を撮らなければ仕事にならない。デモを撮っていたスタッフのカメラマンたちは、少し離れた陸橋やホテルからカメラを向けていた。フリーランスである長井さんが、同じ場所にいたのでは勝負にならない」（『ジャーナリストの死』を特集した、フォトジャーナリズム月刊誌『DAYS JAPAN』第4巻第12号 07年12月）。

- 9) これについては、私の「しゃがんで見えた教育論——団塊世代の悩み——」（大阪経済大学教職員組合『蒼い泉』83年）、「学問の客観性は学者の主体性を排除するのか」（本誌第159～161号 84年）、「自分史としての保険論」（同第168号 85年）を参照されたい。
- 10) 代案を示せ！ と非難するなら、自分でも具体的な事例を探す努力をしてほしい。例えば、そうした事例を紹介する予定である別稿「脱リスク社会への挑戦」（本誌次々号掲載予定）から、そのひとつを示しておく——川戸和史「従業員はコストか財産か」（『朝日新聞』07年11月26日夕刊「窓」）が、「従業員31人の小所帯ながら、ワークライフバランスへの取り組みで気を吐く会社」という具体的な働き方＝働かせ方の例を紹介している——「構内には三角屋根のしゃれた託児所があり、保育士2人が社員の子どもの面倒を見ている。妊産婦が通院したり、夫が妻の出産に付き添ったり、病気の子どもの看病したりするために、有給休暇を1時間刻みで取れるよう工夫している。……プレス加工、金型製作、事務、経理など何種類もの仕事をこなせる『多能職』になってもらい、会社全体で欠勤の影響を緩和する体制を敷いているのがミソだ。」

……講演会で一番心に残ったのは、話の途中で観たビデオだった。若い人たちが色々な格好をして、自分たちの要求を叫びながら行進みたいなのをしていくという内容だった。言いたいことは分かるけど、ああいうやり方をすると関係ない人たちにも迷惑がかかるので、もっと他の方法で気持ちを伝える方法はないのかを考えていきたいと思った。

話を聞いて思ったのは、この方が一番言いたかったことは最後におっしゃった「こんな生きにくい世界はいやだ」の一言が全てだと思います。現在の世界で生きていくために知識や理論で武装して社会に出ていこうという考えは、私も持っていました。けど、現状では法律なども形だけになってしまっているのではないかなと想像しています。

反論として思ったことは「迷惑をかけまくってやろう」という発言については賛同できませんし、嫌な気分になりました。社会を変えるために何か行動を起こすことは大事だとは思いますが、こんな社会なのは企業が悪い→企業を取り締まらない政府が悪い→なら政府に迷惑をかけまくってやれ！ そうなっても仕方ない、という考えは、雨宮さんや池野先生がずっと否定している自己責任論になりませんか？ 政府の自己責任だから仕方ないという考えに結びつく気がします。例えば、フリーターを集めて全員自給自足で生活して労働力を少なくすることによって本来の賃金をもらわないとバイトしないぞ！ みたいな運動は賛同できますが、生活保護を受けまくってやる！ とかは嫌です。その生活保護のお金の中には真面目に働いて税金を納めている人の税金も入っているわけですから、それは無駄遣いにははいけないと思います。

私はいったい何をしているのか、何を目的に生きているのか、将来何になりたいのか、未だに私はこのようなことを考えています。今は学費を親に出してもらい、生活費をアルバイトで稼ぎさえすれば何不自由なく過ごせるという恵まれた環境に置かせていただいています。まあ、世間から見れば温室育ちの若者だと思います。それが嫌で、私は大学をやめ一人暮らしをしたいと持ちかけたこともありました。家族から猛烈な反対を受け復学し今に至ります。……就職なんか何とかなるし、フリーターでもやっていけると危機感・恐怖感は全くありませんでした。

が、本を読んだり講演を聞いて、フリーターにはデメリットしかないように思えました。アルバイトの給料なんか、たかが知れてますよね。ボーナスも出ず、いいように使われ、要らないタイミングが来ると捨てられる。そんな危ない環境であることを認識させていただきました。そういえば、大学一回生の時にダンボール工場です。アルバイトをしていたのですが、募集の時は「長期アルバイト募集」と書いてあって辞めるつもりもなかったのに面接を受けると採用されました。しかし、二カ月すると、生産量が少ないのでアルバイトから辞めていってくれと言われました。学生でもう一つのアルバイトをしていたので何とも思いませんでしたが、そこにはフリーターの方も多くおり、一週間前に言われても次の職場を見つけることができるわけありません。そう考えると、アルバイトは会社側にとっては最高のアイテムなのかもしれません。かといって、本や講演で

は、就職してもあながち良いとは思えません。どうすればいいのでしょうか？

講演の中で兩宮さんたちのデモ活動を見ました。すごくパワーあるデモだなと思います。フリーター、派遣、正社員すべての言い分は正しいと思うのですが、それで改善される気がしないのは私だけでしょうか？ 何もしないのは確かに進歩がないと思いますが、あのデモを見て経営者たちは焦るでしょうか？ 鼻で笑っているように思えます。このデモもその言い分はどこで改善されるのですか？ 警察ですか？ 私は警察ほどあてにならないものはないと思います。金で動くし強いものには弱いし。日本政府が作った世の中にいる以上どうしようもないと思います。自分が何年後かに同じ悩みにぶつかり、それが労働基準法違反であったとしても、私は自分の意志を噛み殺すと思います。

兩宮さんの考えのほとんどには共感できますが、この世の中は長く続くと思います。どうすれば良いかわかりません。デモが悪いとも効果的とも思いません。しかし、この日本で生きていくにはこの理不尽な環境から逃げることは困難だと思います。

逆に、素直に受け入れるレポートもあった――

……デモのビデオの内容は、大勢のフリーターが集まり、道行く先々の店に、時給を上げろ！ と要求して、大音量の音楽を流しつつ、行進していき、デモが終わる頃には人数も倍以上に増えてたりしていました。同じ思いの人達が多いということの証明だと思いました。このビデオを見て、講演会の中頃に兩宮さんが言った言葉、「国家に迷惑をかける！」の意味が少しわかったような感じがしました。フリーターは世間的に地位が小さく、発言力も低いと思います。そんな小さな存在が国家や会社のような大きな存在に要求するには迷惑をかけてアピールするしかない、ということだと思いました。

新規なものへの両極端への反応である。この分岐点は何なのか？ 教育にとどまらない生き方の問題が絡むのだろう。

ともかく、こうした素直さが下地にあると、種々の自己責任論に通底する「会社あつての労働者」論とは異なる物言いにもスーッと近づけるはずである。原則的な闘いを継続している郵便労働者たちのグループが発行する、『伝送便』編集委員会『伝送便』400号（12年7月1日発行）は、「組織を蝕む自爆営業」を特集するなかのひとつ、「『郵便丸』を沈める自爆営業」で、「船を沈ませない様にするのは当たり前だが、船に乗る人間が苦しみもがきながら航海している事実から目を背けてはいけない。」という物言いをしている。会社あつての労働者という俗論に対峙し、それを跳ね返す表現＝物言いの一つとして紹介しておきたい¹¹⁾。

11) 同誌同号に、「『全社員の総力を結集して目標達成』など、勇ましい営業スローガンが掲げられ、個々人の実績がグラフで貼りだされ……あげくは販売実績『ゼロ者』を対象にした会議まで召集され……まるで営業ゼロ者は非国民のよう、そして『自爆』が常態化する」郵便職場に関して、「数年前ベストセラーになった『働かないアリに意義がある』（長谷川英祐著）」を紹介する「頑張らない

(4) 能力主義と自己責任

このように学生たちの間に自己責任論が根強いのは世間一般の風潮によるのだが、それについては別稿「高齢社会論の貧困」で高齢社会論を例に詳しく触れる（本誌次号を予定）ので、ここでは大学の例で示しておきたい。

次のようなレポートは、競争がなければ人々は怠けてしまう（これは自己責任の根本的発想である）という能力主義を素直に述べている――

……今の世の中はどんどん格差社会が広がっていくと言われている。資本主義経済においては格差が生まれるのは仕方がないと思う。逆に社会主義になってみんなが平等になったとき人はどのような行動をとるのだろうか。楽しんでお金をもらおうという発想が生まれるのかもしれない。みんながそういう発想になってしまったら国としての日本が成り立たなくなってしまう。自分は資本主義経済のほうが良いと思うが、大事なのは努力と結果の因果関係がちゃんと成立していることだと思う。今回の労働問題で出てきている人たちは労働という努力に対して収入という結果がちゃんと結び付いていない。企業によって都合のいい派遣社員を用いて何時間もタダ働きをさせられる、こんな世の中を許している企業は本当に腹立たしく思う。……重要なのは国民を守るためであり、会社を守るためではない。

「大事なのは努力と結果の因果関係がちゃんと成立していることだ」と言うこのレポートの基底には「努力と結果の因果関係がちゃんと」科学的に成立しうるのでという信頼があるのだが、しかし、それは幻想でしかない。ひところ流行った能力主義型賃金・査定が行き詰まり、その撤回ないし大幅な修正がなされている現実がそれを示している。

問題は、こうしたレポートがなぜ出るのか、つまり学生がこういうことをどうして考えるのか、である。学生たちのこれまでの生育史の中で、そして日々の日常の中で、こうした考えがマスコミを通じて流され続けているからである。その一例をここに示そう――

研究で一番重要なのは人の能力だ。イチローと二流選手の給料が100倍違っていても誰も格差とは言わない。研究費についても、審査が公平かつ透明になされていれば、配分の差は能力の差によるものであり、格差ではない。

私たち（日本学術振興会）が実施している科研費の審査は100%完全ではないにしろ、これらの点に最大限配慮したものだ。……科研費が……旧帝大に集中しているのは、審査の問題ではなく、システムとして、優秀な研究者がそれらの大学に集中しているからだ。この現実を無視して、私大にもっと配分しろというのは、極論すれば「能力が劣る

アリに意義がある」というコラムがあり、「営業成績抜群で仕事も早く、そのうえ誤配・事故もしないというような『期待される社員像』ばかり追い求める組織はどうなるのでしょうか。」と能力主義・成績主義一辺倒の会社のありように真っ当な異議を呈している。

研究者にも科研費を配分しろ」ということで、「逆差別」にもなりかねない。

科研費を獲得したければ、私大ももっと努力すべきだ。例えば、教員1人当たりの応募件数は国立大の3分の1以下にすぎない。さらに、科研費を獲得できる優秀な研究者を国立大から高給で引き抜くくらいの気構えが必要だ。

これは、国の競争的研究資金の四割を占める科学研究費補助金（科研費）の配分に、国立大と私立大の間に「格差」があるという声に対して、戸塚洋二・日本学術振興会学術システム研究センター所長が答えたものである（『朝日新聞』07年11月26日）。

先の学生のレポートは「努力と結果の因果関係がちゃんと」科学的に成立しうるのでという信頼によっていたが、この戸塚氏の場合には信念によっているだけにタチが悪い。信念だから話し合いなど成り立たないからである。

そもそも「イチローと二流選手の給料が100倍違っていても誰も格差とは言わない」だろうか？ そんなことはない。第一に社会システムの問題として、たかが野球で上手だからといって桁外れの報酬を取るのは正当なのかを問われよう。基本的に人間の生存に必要なモノ・サービスの生産に直接携わる人たちの労働成果から、イチローは配分を受けるのである。その大きさは自ずと制限がある。第二に、同じ球界内の問題からも格差は制限されなければならない。イチローひとりで野球はできないのだから。戸塚氏はイチローというスター選手を持ち出せば誰も反論できないだろうと思っているようだが、すでにこうした反論があるのだからハナから戸塚氏の論理は破綻している。さらに、野球と学問を同一視していいのかどうかの問題がある。言い換えれば、イチロー選手と戸塚氏（たとえばとしての話である。誰でもいいのだ）を重ねていいのかどうかの問題である。

それにしても、である。科研費が旧帝大に集中しているのは「優秀な研究者がそれらの大学に集中しているからだ」という戸塚氏の傲慢な認識、そして、その認識に立って「能力が劣る研究者にも科研費を配分しろ」というのか！ と恫喝する。だから臆面もなく、「私大ももっと努力すべきだ」という説教を垂れる。

「教員1人当たりの応募件数は国立大の3分の1以下にすぎない」と戸塚氏は言うが、一方には多額の税金をつぎ込み、他方には基本的に授業料だけで運営させて高等教育の大半を負わせておくという不均衡な国公立と私立大をそのまま前提にすることの意味はそれぞれの教員の研究教育の労働条件には大きな格差があるということなのだが、国公立大（東大）にいた戸塚氏はそれについては一切語らない。それでいて私立大に、さらには「科研費を獲得できる優秀な研究者——ひょっとして戸塚氏のような！——を国立大から高給で引き抜くくらいの気構えが必要だ」と言うのだから、詭弁でしかない。

あるいは、東京大学・朝日新聞共同シンポジウム「大学の試練と挑戦」（『朝日新聞』07年11月28日）での丹羽宇一郎・伊藤忠商会長の弁——「2人に1人が大学に進学する今、もはやエリートではない。エリートなき国家、企業は滅びる」・「[エリートとは] 自分は選ばれ、責任を持って日本を引っ張っていくという自覚を持つ [人間のこと]」。

先の詭弁といい、この傲慢な認識といい、それらが大きな顔をしてマスコミを賑わして

いる¹²⁾ のだから、学生たちがそれに影響されるのは当然なのかもしれない¹³⁾。

(5) 自己正当=対話拒否型

これまでの自己責任論は対話がまだ成り立ちうるものであったが、聞く耳を持たないとか独善的なタイプのものもある――

……率直な感想を先に私の意見で述べると、『私の心の琴線には触れない』という印象を私は受けた。……

雨宮氏の講演会を聴講した私の見解によると、テーマは「自己責任論の否定」にあった。自己責任論を否定する根拠として日本社会の格差を訴え、結論として「社会が悪い」に至った。講演の論点は「社会が悪い」という大義名分な論点からイデオロギーや日本の社会、また個人的な思想・価値観・世界観を関見するものであって、宗教対立などと

-
- 12) この格差社会、低迷する経済と憂慮される今日にあって、そんな関係ないという階級は存在するし、そこから醸し出される風潮は根強く、人々の憧れの的となる。そうしたものの一つとして、毎日新聞12年7月1日書評欄「MAGAZINE」が紹介する雑誌『Richesse (リシェス)』がある――「先週創刊され、書店で独特のオーラを放っている雑誌はこれ。ゴージャス系サンサバ誌の最右翼『25 ans』の姉妹誌で、対象は富裕層の「アラフォー」女性だ。「リシェス・オブリージュ (富める者がなすべき義務)」と教養を説き、旅の特集では、ドバイ辺りは言わずもがな、宇宙旅行 (約二十万ドル) も。服には、「着回し」「通勤着」なんて発想はあるはずもなく、美食はパリの星付店、パレエはマリンスキーと、ベースは王道で地固め。世の低迷に断固抗し、女子大に逆風が吹く今「聖心卒のCEO」を紹介する姿勢に、ブレはない。表紙は中央が円形に鏡加工され自分の顔が映る。カバーストーリーを作るのは貴方自身です、という訳だ。お金だけでなく「自分」をしっかり持った大人の女性向けですよ。」なお、松原隆一郎「危機に瀕する米国経済の『自己診断書』」(毎日新聞同上)によれば、ジェフリー・サックス『世界を救う処方箋』(野中邦子・高橋早苗訳 早川書房)は、100兆円近いアメリカの財政赤字が「ひとえに高額所得を得、多くの資産を保有し、大卒以上であるような富裕層が、少ない税率しか負担しなくなったために生じた」と断じ、「メディアはアメリカの危機が『大きな政府』のせいで生まれたとキャンペーンを張り、サブプライム危機を引き起こした当事者の金融機関幹部は責任を問われるどころかボーナスを稼いできた」といい、そして、有力企業の圧力団体が政策アジェンダを支配するような政治形態＝「コーポレートクラシー」がアメリカの政府と議会を羽交い締めに行っているために「アメリカ、ボロボロや」という状態なのに、「この苦境はヒスパニックや低所得者が福祉で税を持ち逃げしているからだ、というのが新自由主義の宣伝だが、事実を挙げ」て「反論」している、という。だからこそ、「いまなおアメリカを持ち上げる我が国の『小さな政府』主義者に読ませたい一冊だ」と松原氏は書評を締める。にもかかわらず、本論で展開してきたように、全く正反対の自己責任論が依然として根強く、そして『Richesse (リシェス)』や『25ans』が発売され、話題になるのである。
- 13) 本文に示したシンポジウムで、ある大学人は「学生の授業評価にも真摯に耳を傾けるべきだ」と説く。学生の授業評価とは大学が生き残り戦略の中で学生たちを“消費者”と位置づけた延長線上のものであることなど、大学「改革」の評価については、本誌掲載のこれまでの私の諸論文や巨大情報システムを考える会『不思議の国の「大学改革」』(社会評論社 94年)を初めとする「変貌する大学シリーズ」に書いた私の諸論文などを参照してほしい。

同様に意見は常に二極化されてしまう。……教授〔池野〕が仰せられた「日常会話で『結婚されていないのですか?』という問いは間違っている」に関しても、二極的な見解がある。例えば、私は結婚していない人の信用性を若干疑ってしまう。これはまぎれもない事実である。根拠は、自分が生きている社会が自分よりも高い位置にあり、社会上で生きていない人間に多少恐怖心を感じるからだ。究極に例えるならば、ホームレスは正直怖い。社会における身分がないため、誰なのか分からないからだ。……自己責任論の否定とはどういうものだろうか。社会で行為・選択した自己に責任がないことになる。責任の概念そのものが存在できないのだ。要するに、近代社会存続の否定であり、混沌を意味する……まだ日本が日本的経営による三種の神器（終身雇用・年功序列・労働組合）スタイルをとっている時代はゆとりのある生活ができ、魅力的な社会システムだったように思えるかもしれない。しかし、日本は失われた10年以後、日本はグローバル化した国際経済の中で生き延びるために成果主義的な政策を余儀なくされた。現在の日本経済は持ち返したように思えるが、世界から見た日本の格付けは予想以上に低い。話でもあったように、アウトソーシングは経営戦略的に企業がそうせざるを得ない政策であった。このような日本国の先行き不安定の時代の中でどのような条件で企業側は労働者を雇用していけばよいのか……何故私がこのような質問をしたかという……自己責任論を否定した上で雨宮氏が描く将来性が全くフィクションであることに疑問を感じたからである。……もし仮に自己責任がない世の中であるならば、社会の秩序が成り立たないことにより、今現状よりも過酷で悲惨な混沌とした状況が予想される……さらには、雨宮氏は持論に対する対策と具体的なヴィジョンやイメージを持ち合わせていない。雨宮氏は以下のようなことを仰っていた。「就職ができないのは勉強をしなかった自分が悪いわけではない」。このようなことが具体的な自己責任論の否定と責任の社会転嫁だとするならば、「食事ができないのは働かなかった自分が悪いわけではない」とも言い換えることができる。そうすると、自己責任論の社会転嫁は、新しい社会システムの構築に等しいとも言える。では、どのようにして社会を変えていけばよいのか、どのような社会がよいのか、を具体的に提示していただかなくてはならない。クレームとしては、仕事で自己実現しなくてはいけないことを「もっと緩くしたい」・「もっと趣味などの時間ができたほうがいい」などの、具体的な政策要件なしで述べるのは了解し難い。また、雨宮氏の本などを拝見しても、一言で遊び人であると伺える。また、付き合う人間（ビジュアル系のバンドの追っかけから右翼に至るまで）が変わることで自分の意見や世界観が変わるのは説得力が欠けてしまう要因の一つだ。私が講演を聴講して気づいた結論は、具体的な政策なしに問題提起し疑問を投げかけても、それは根源的に解決されないことであるためにフラストレーションしか溜まらないという結論に至った。……問題をどう解決していくのかを「競争しない自由」で片付けてしまうのは、あまりにも酷な話であると思う。……私は自己責任肯定という立場をとっている。自己責任否定の社会にメリットがあるならば幾らでも考えを改めたいと思う。そのために具体的な社会図を提案していただかなければ移りようがないのも事実である。

「私の心の琴線に触れなかった」とか、「二極的な見解があ」って「ホームレスは正直怖い」という見解¹⁴⁾は侵されざるものであると言われて、対話の糸口を求めることができるだろうか。「正直」なホンネを語っているからいい、のではない。単に差別を撒き散らしているだけでしかない。さらに、「遊び人」というレッテル貼りも思考放棄である。

じつは、思考放棄というか現状肯定は今日ではプロの世界でも蔓延っている。だからこそ、学生たちも安心できるのだ。例えば、梶山寿子（ジャーナリスト）氏は、原正紀『採用氷河期』を紹介する中で企業が若手人材獲得競争にどれほど知恵を絞っているかを書いて、「しかも、どれだけ労力とコストをかけても、定着しない、定着しても成長しない、という問題も生じる」と続け、「採用担当者のため息が聞こえてきそうだ」と締める。企業が誠意をもって頑張ってもダメな学生が壊しているというニュアンスがここにはある。そして、久田恵（ノンフィクション作家）氏は、川崎昌平『ドキュメント「最低辺生活」』を書評する中で「ネットカフェ難民……の具体的な日々を知るにつれ、彼らの生活を若年層の『経済格差』の実態と見るだけでは捉えきれないものを感じる。／ほら、いたでしょう？ ヒッピーとか、フーテンとか、いつの時代にも、家を捨て、街を浮遊して生きる若者たちが。ネットカフェ難民の少なからずは、その系譜に属する若者なのかもしれない」と言う。つまり、問題になっている貧困としてのネットカフェ難民は若者の「文化」なんだ、好きでやっているんだ、と言うのだ。そういう理解でいれば自分は問われずに済み、そのままの自己は安泰なのである。物事を論評する際の「想像力」の問題であり、そして「他人事」で済ます姿勢・視点の問題である¹⁵⁾。

14) 今は女性ホームレスのグループホームを運営する角田妙子さんが日雇い労働者の街・山谷に入った当初には、「ホームレスの人が隣にいと、膝がガクガクするくらい『怖い』と感じていた」という（竹内綾「ごめんください」『ふえみん』07年11月25日号）。同じ「怖い」という言葉だが、そこにはとてつもない距離がある。あるいは、「若者、野宿者ときずな」（『朝日新聞』07年11月20日大阪版）を読まれたい。

15) 小屋亮「書評：湯浅誠『貧困襲来』山吹書店 07年」（『PEOPLE'S PLAN』第40号 07年秋号）は、自らフリーターである小屋氏が「あまりに日常的なので『自己責任論って何が問題か？』と言われてもうまく説明できませんでした。でも……この本で……私は目からウロコが取れた」と言う——「つまり日常的に『自己責任論』を振るっていた私には、それなりの余裕や、それを土台にした権力があつたってこと」、「それでも敢えて私が語るとすれば、『それでも私たちはそんな絶望的な社会の現状に何ができるのか？』だ……具体的な行動は、気持ちの上でも実際の問題としてもなかなか難しいって誰もが思うのではないのでしょうか？ そうであるならば、せめてこの本の最終章は是非読んで欲しい。それは筆者が直接現場で培ってきた知恵が、誰でもできる実践として書かれていると思うから」、と。本当に自己責任論を振りかざしたままにいる人たちに、是非読んで欲しい。それに関連して、安田浩一『ネットと愛国 在特会の「闇」を追いかけて』（講談社 12年）は、自らの内にある権力性・差別を暴きだす鏡としての「在特会」を自分の問題として取材して読者に問いかけている。鈴木邦夫の同書への書評（『僕ら』に住みつくおぞまじさを直視『AERA』12年7月2日号）が、とりわけその点で同書を推している——「差別用語を連発し、口汚く罵る……『よくぞ言ってくれた』と賛同する人々もいる。……孤独な個人が急に『国家』になる。巨大なロボットに変身できる。はしたないと思われていた、差別用語も、個人的な嫉妬も、『国家的怒り』に変換してくれる。／安田氏は言う。『在特会とは何者かと聞かれることが多い。そのたびに私は、

これらはたまたま『朝日新聞』07年12月2日書評に同時に見られたのだが、それはこうした類いのものがかかんに蔓延っているかの証明でもある。

だからこそ、今日にあってはやはり、「『結局、それじゃ食えないから仕方がない』と大人はよく言う」・「僕があれこれとツイッターでつぶやいていて、最も多い反論は、そんなことを言ったって今の経済の中では無理でしょ、というものだ」と坂口恭平『独立国家のつくりかた』（講談社現代新書 2012年 p.68, p.101）は嘆くのであり、そして、自分を問わない批評・論評の蔓延を次のように鋭く告発する――

震災のあとで、言論の世界でも、建築の世界でも、美術の世界でも、芸術全般の世界でも、僕は放射能の話をするのだけれど、みんな話をそらす。それでいいわけがないのに。……それは仕方がない、で終わってしまう。それじゃ駄目なのではないかと僕は思うのだが、どうやらそんな質問に答えなくても、彼らは仕事を失っていないようだ。……「それ」を考えてしまうと、仕事ははかどらない、今まで言ってきたこととぶつかってしまっただけで引っかかる、というような「それ」をやっぱり避けちゃうのが、今の表現になっている。(pp.74～75)

みんなちょっと居心地が悪くても、楽をしたいから。見たくもないものを見ないで済むなら、進んでそういうシステムの中にも我慢するものだ。でも、忘れちゃいけない。それはあなたのシステムじゃない。みんなの無意識がつくってしまったシステムである。

こう答える。あなたの隣人ですよ――』／そして、『この隣人』は僕ら自身の中にも住みついている。『建前』では言うてはならない。でも内心はチラッと思うことがある。差別や排外主義の芽だ。『ほら、お前たちにもあるだろう！』と見せつけられる。そのおぞましさに思わず目を伏せ、無視しようとする。だが、放っておいてはならないと安田氏は思った。これは自分と向き合い、闘うことだ。勇気がある。『彼らは、われわれ日本人の“意識”が生み出した怪物ではないのか？』とまで安田氏は言う。

そして、池澤夏樹・本橋成一『イラクの小さな橋を渡って』（光文社 03年）が提示する視点、同書を高く評価する米原万理『うちのめされるようなすごい本』（文春文庫 09年）の視点――「農村で収穫を終えた女、バザールの賑わい、モスクでの祈り、遊園地で興じる子供たちの澄んだ瞳、カメラを向けられて恥ずかしそうな笑み、『この子らをアメリカの爆撃が殺す理由はない』という言葉に胸を突かれる。二〇〇一年に国連が発表した『経済制裁によるイラクの死者の数一五〇万、内六二万人が五歳以下の子供だった』という統計数字が決して他人事ではなくなる。／いつの頃からか、先進国モードになってしまった私たち日本人の想像力を刺激し押し上げてくれる詩集のような本。』さらに、保坂渉・池谷孝司『ルポ 子どもの貧困連鎖 教育現場のSOSを追って』（光文社 12年）を書評する、八柏龍紀「生き苦しさへの『告発状』」（『週刊金曜日』12年6月22日号）の視点――「いまだに『勝ち組』意識に乗り、不遜な物言いに終始する企業人や官僚たち。軽薄で無自覚なマスメディア。『変革』の空虚な一つ覚えに自己実現だけを欲望する政治家。そして劣化が著しい行政機関。子どもの未来が保障されている世の中こそ、豊かさの源流である。まずこの事実を眼を開きたい。」などは、本文に示したプロの書き手たちの底の浅さ・無責任ぶりを的確に指摘している。

すべての人の無意識が構築したもの、それが匿名化したシステムである¹⁶⁾。(p. 165)

さて、先の学生の言う「自己責任論の社会転嫁は、新しい社会システムの構築に等しいとも言える」という理解は正しいのだが、しかし、だからといって、「では、どのようにして社会を変えていけばよいのか、どのような社会がよいのか、を具体的に提示していただかなくてはならない」と相手のせいにするのは逃げでしかない。自分で考えるしかないし、そして、一緒に考えていくしかない。それを相手のせいにして終わりとする姿勢は思考放棄である。さらに、それは相変わらずの〈代案を出せ〉論であり、それがしばしば権力側によって使われるせいで学生たちの中にもメディアを通じて深く影響しているともいえる。

(6) もうひとつのシステムへの途

ナオミ・クライン講演録「もうひとつの可能な世界——弾圧から蘇る世界」(安濃一樹訳・解説『世界』07年12月号)が、通俗的であるが浸透してしまっている「代案を出せ」論に関連して的確に指摘しているので紹介しておきたい。「もうひとつの世界に近づけないのは、私たちに理想がないからではありません。……理想を現実にはできないのは、資金が足りないからではありません」という冒頭から始まって、次のような結びに至っている——

私はこの四年間、裏切られた夢や奪われた世界を、近代史の塵屑の中から一つひとつ拾い上げるようにして、調査を続けました。……理想の戦いで負けてはいません。知略で出し抜かれたこともなく、議論に敗れてもいない。私たちが勝利できなかったのは、運動が打ち砕かれたからです。時には陸軍の戦車(タンク)によって打ち砕かれ、時にはシンクタンクによって打ち砕かれました。シンクタンクと呼ばれる頭脳集団は、戦車(タンク)を製造する企業からお金をもらって物事を考える(シンク)人びとの集まりです。そして、陸軍タンクとシンクタンクが手を結ぶとき、最強のチームとなることは、私たちの歴史が教えてくれます。……もうひとつの世界は、富める人びとの利益を制限する世界です。だから彼らは手を下して、その世界を破壊してみせた。私たちは理想の戦いで敗れたことは一度もありません。繰り返し仕掛けられた汚い戦争に敗れただけで

16) この点について、鈴木杏子「“住まいから社会を設計”する若い建築家の『独立国家宣言』」(『週刊金曜日』12年6月22日号)が的確な書評をしている——「おかしいのは、『壊れた機械』のような社会制度そのもので、それを疑おうとしない私たちではないのか。／そんな根源的な問いを投げかけ、新しい公共と経済の在り方を模索し、提唱している。」さらに、斉藤環「思考しろ 広げろ 生きろ——坂口恭平著『独立国家のつくりかた』」(朝日新聞12年7月8日読書 売れてる本)の書評もある——「匿名のシステムの中に直接の取引を。思考しろ、広げろ、生きろ、と坂口はそそのかす。今この本がよく読まれている事実は、若い世代をさいなむ閉塞感の裏返しだろう。『やりたいことを見つけよ』と命じ続けられる閉塞。坂口はそれを否定する。人間は自分にしかできないことをやるほうが、はるかに自由なのだ。」

す。

代案を出す側に責任をおっかぶせるやり方が誰の手によるものなのか、そして、その手法で社会の中でいい目を見ている人たちが現状肯定をみんなに強要してきた歴史——「繰り返し仕掛けられた汚い戦争」¹⁷⁾——に、若い学生たちにはもうそろそろ気づいてほし

- 17) これまでの反原発運動もまた同じである。本間龍『電通と原発報道——巨大広告主と大手広告代理店によるメディア支配のしくみ』（亜紀書房 12年）は、大手広告代理店元社員として内部から東京電力が広告費に巨額を投じることでメディアを統制している実態を示している。また、六ヶ所村にこれまでに給付された電源立地地域対策交付金の総額は400億円に達するというが、同地域で脱原発の運動を続ける菊川慶子さんによれば、「おカネのかかる都会型の暮らし、都会並みの生活をするようになってしまった……『おカネがなければ生活ができない』と思うようになったことが最大の罪です」と語る（内野祐「原発関連マネー」『生活と自治』12年8月号）。なお、私（池野高理）の『保険社会——情報化・原子力時代と保険』（技術と人間 増補版 98年）も今日の社会を原発ファシズムと把握している。そして、3・11フクシマ後もなお、「原発は不可欠なエネルギー源だ」と居直る側による種々の「繰り返し仕掛けられた汚い戦争」が私たちの目の前に差し出されている。たとえば、山田孝男「風知草：意見聴取会の激白」（毎日新聞 2012年07月23日 東京朝刊）がエネルギー政策意見聴取会（政府主催）での中電の課長の発言を紹介している——「放射能の直接的な影響で亡くなった方は（福島原発事故の場合）一人もいらっしゃいません。5年、10年たっても状況は変わらないと思います。疫学のデータから見てまぎれもない事実です。5年、10年たてばわかります」・「実質的な福島の被害って何でしょう。警戒区域設定で家や仕事を失ったり、過剰な食品安全基準値の設定で作物が売れなくなるなど、経済的な影響が安全や生命を侵してしまっている事例だと思います」・「経済が冷え込み、企業の国際競争力が低下すれば福島事故以上か、それ以上のことが起きると考えています」。こうした俗論に乗って、政府は関電の大飯原発の再稼働を認めたのである。また、木幡仁・木幡真澄『原発立地・大熊町民は訴える』（拓殖書房新社 12年）は、当事者体験を語るなかで、地域に「避難指示は出ていなかった」ものの「東電の人たちは、十一日には逃げた」・「東電は、周囲の人はほっぽらかして、自分たちだけで勝手に逃げた」（p. 38）こと、その後も町の行政は国・東電と一体となって事実を隠そうとしていることを告発している。さらには、「大手メディアは二極化の一方、つまり社会の底辺にいる人々の話ばかり取り上げ、社会の上層にいる人々の動向をほとんど報じていない」なか「私は日本社会の二極化と富裕層の動向について取材してきた」（p. 13）と誇る（その内容の評価は別である）、山田順『資産フライト——「増税日本」から脱出する方法』（文春新書 11年）も、畑違いのテーマを論じながら（やはり原発は社会の根幹に関わるのである！）向こう側の戦線に馳せ参じている。スーツケースに1000万円の現金を詰めて香港行きの飛行機に搭乗するという富裕層の資産フライト（キャピタルフライト＝資本逃避に因んで名付けたもので日本からの資産持ち出し＝逃避のこと。「資産フライトというのは、マネーの『さよならニッポン』である」p. 108）に随行取材するなかで豪華な食事を一緒にしながら「夫人は分子料理が初めてで、ウェイターの料理の説明に何度も質問していた。しかし、男同士はやはり国や経済の話になる」（p. 35）という差別視点、「純金融資産1億円以上の方だけが入会できる」クラブの代表者が「お金を持っている人間が、お金を運用しないで死蔵してしまうと、社会全体が豊かにならないんです。お金を持っている人間には世界で資産を運用してもらおう。そして、その利益を日本に持ち込んでもらえば、税金も殖えます。／最近のアンケート調査で驚くのは、20代、30代の若者が『日本をよくするために政府に望むこと』の上位はなんと、大企業と富裕層に増税をすることだそうです。若者がそんなことを願う世の中なんて、どこかおかしい。元気じゃないですよ。若者たちも積極的に資産を運用しなければダメですよ」（p. 105）と語るのを好意的に受け止め

い¹⁸⁾。なぜなら、歴史は若者たちのものなのだから。

(本稿は、本学特別研究費による成果の一部である。)

ているスタンス [=「現代の若い男性たちは『草食系』と言われ、非常に淡泊だ。『小さな幸せ』(スモールハッピーネス)を追い求めるだけで、お金に対するどん欲さがない」(p. 57)とカネへの執着心を高く評価する山田氏だからこそ、「小泉政権のときの経済財政政策担当相・竹中平蔵氏は、国内では数年間で四つの不動産を取得し、しかも銀行借り入れと一括返済を繰り返すという奇妙な取引を行っていた。そのうえ、毎年暮には住民票を海外に移し、年を越してから戻すという効果的かつ合法的な節税術を身につけていた。」(p. 80 傍点一池野)という立場に立つ] などなどに私はうんざりしてしまうのだが、今は原発に関連しての言及にとどめなければならない。山田氏は、「福島第一原発3号機の水素爆発の映像を見て、家内を説得して、すぐに羽田空港に向かった。……私が家内の実家がある宮崎に逃げたことを知った他の友人たちは、『いい加減にしろよ。それじゃ非国民と同じではないか』と、私を非難した。『なにもそこまでする必要はあるのか』と言った人間もいた。／しかし、彼らは、日本の本当の姿を見ていない。また、見ようとしていない。……この温度差はなんなのかと、私は考え込んでしまった。」(p. 51)と、原発のリスクに鈍感な「友人たち」を批判しながら、菅首相(当時)の浜岡原発全面停止要請に対し投資家たちが「算数ができないのか?」と批判したことに賛成している(正確に引用すれば、「この投資家の考え方を一概に非難するわけにはいかない」)——「地震と津波が怖いなら、フクシマの教訓から対処法として、たとえば津波を防ぐための高度な防護壁をつくれればいい。この費用は1億~2億ドル……ぐらいですむだろう。超特急でやれば1年でできる。ところが、停止したことで化石燃料の発電所を再稼働させることになり、急遽、天然ガスを輸入することになった。この費用はその何十倍、25億ドルもかかる……明らかに計算ができていない。日本人はなぜ、こんなことに耐えられるのか? どんなことにもリスクがあり100%の安全はない」(p. 53~54)。これは明らかに矛盾ではないのか。「どんなことにもリスクがあり100%の安全はない」、だから原発も「算数」問題として容認すべきと言うのなら、山田氏はなぜフクシマ事故の危険を察知して逃げたことを非難する「友人たち」を嗤うのか。山田氏の論理からは、彼等こそが正しいのではなかったのか。

- 18) もちろん、若者だけの問題ではないのだが。金子勝・大澤真幸『見たくない思想的現実を見る』(岩波書店 02年)が、気づきの困難さを指摘している——「経済格差と言うと、強者が弱者の犠牲のうえに、あぐらをかいているという構図を描きがちだ。しかし、日常にあふれている『事実』は、強者が弱者をいじめているという勧善懲悪の構図ではない。社会的事件の多くを見ると、弱い者がより弱い者に向かって牙をむく社会が、そこにある。……市場原理主義は、強者のみにゆとりを与え、弱者同士を競わせる。……弱者にとって、そもそも強者は競争相手にはなりえない。……弱い者は同じ弱い者を蹴落とさなければ、生き残れないのだ」・「市場競争は、こうして『共同性』を解体する傾向を持っている。それは、他の弱者よりも少しでも上でいたいというメンタリティを生む。……さらに、生活に一定のゆとりを持つ者たちは、こうした弱者への同感を失い、取り締まるべき対象としてしか映らなくなる」(pp. 169~170)と。現に、コリン・ジョイス「歓喜に隠れた怒りのロンドン」(『Newsweek』2012年7月11日号)によれば、格差社会であるイギリスでは「豊かで穏やかな中年の友人が、暴徒は『銃殺すべきだ』と言っている」という——「怒りは階級の下から上に向けられるだけでなく、上から下にも向けられている。ロンドンの中流層は銀行や政治家、外国の富豪に腹を立てているだけではない。暴動を起こす貧困層の若者たちにも怒りをぶつけている。彼らの生活のために自分たちの税金が使われているからだ。豊かで穏やかな中年の友人が、暴徒は『銃殺すべきだ』と言っていたのを思い出す。」